



大地を震わす和太鼓の律動に、
かんだか
甲高く鋭い笛の音が
重なり響いていた。



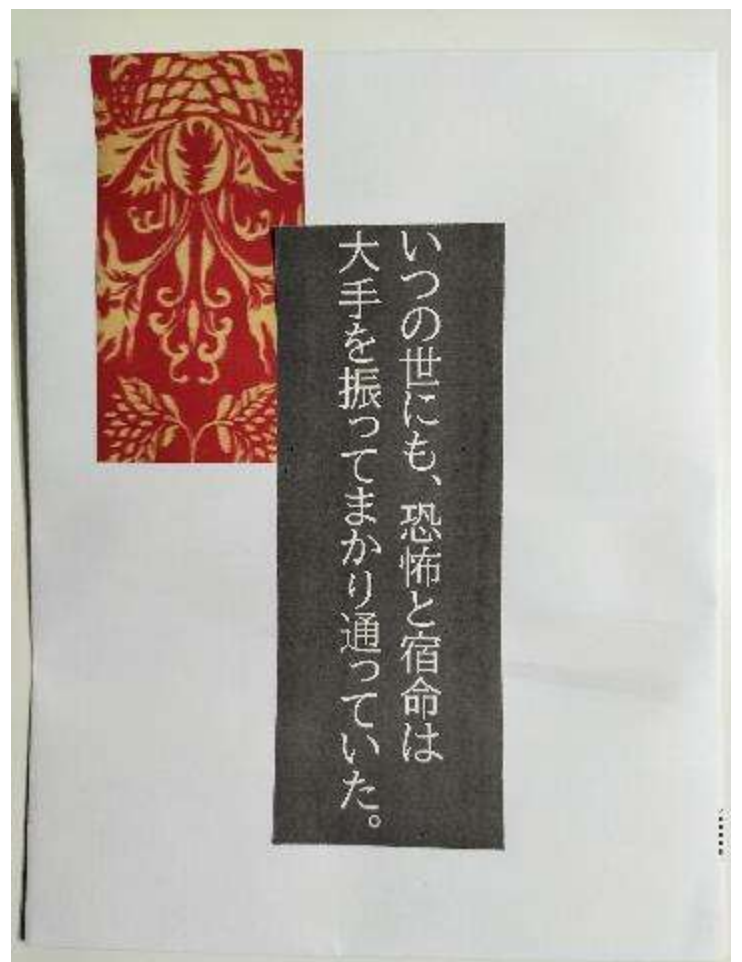
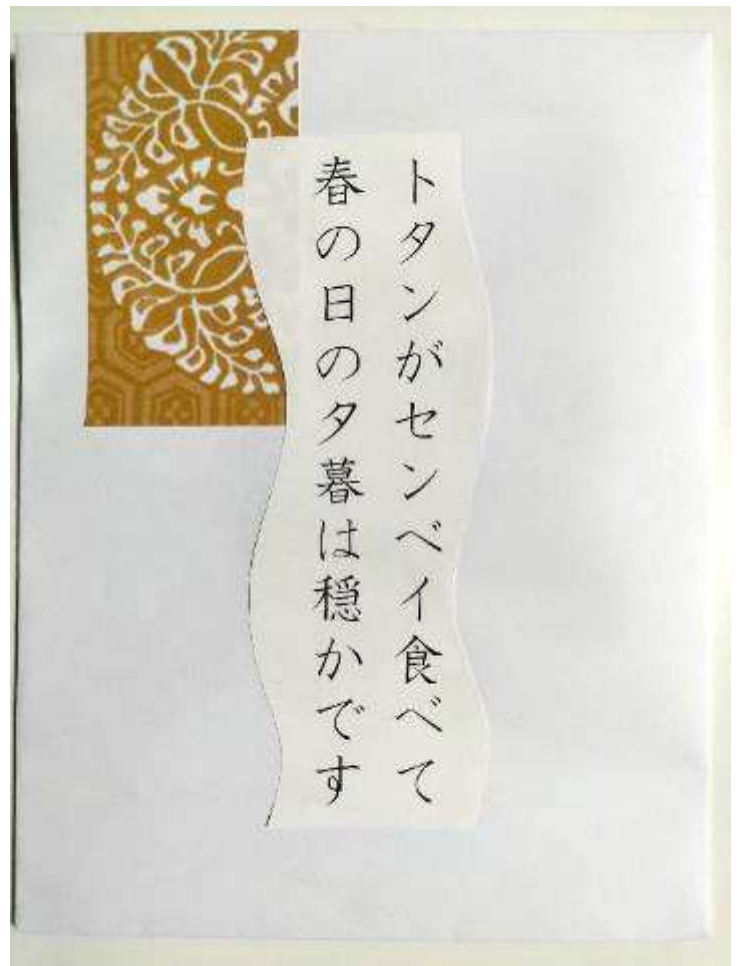
水のように澄んだ空が星を漬し、
ひた
星を現像していた。

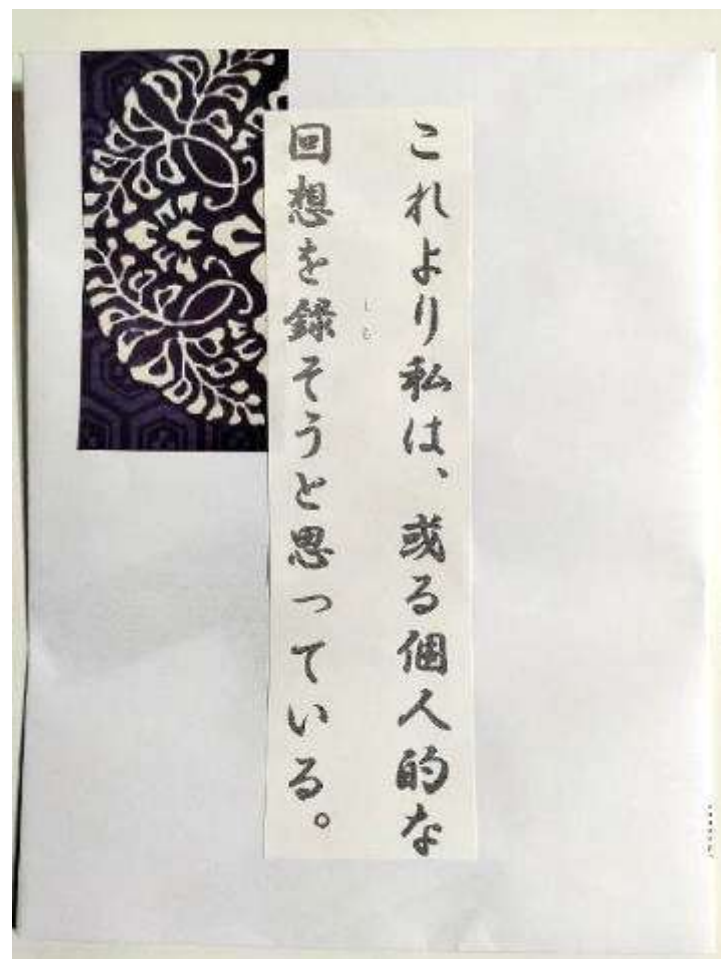


「完璧な文章などといったものは存在しない。
完璧な絶望が存在しないようにね」



「え、ガチで？」







おれが非情の大河をくだっていたとき、
おれを導く船曳きの綱の覚えはもうなかった、



— あなたの歯が
生まれつきとても
健康であることは
とてもよくわかり
ました。

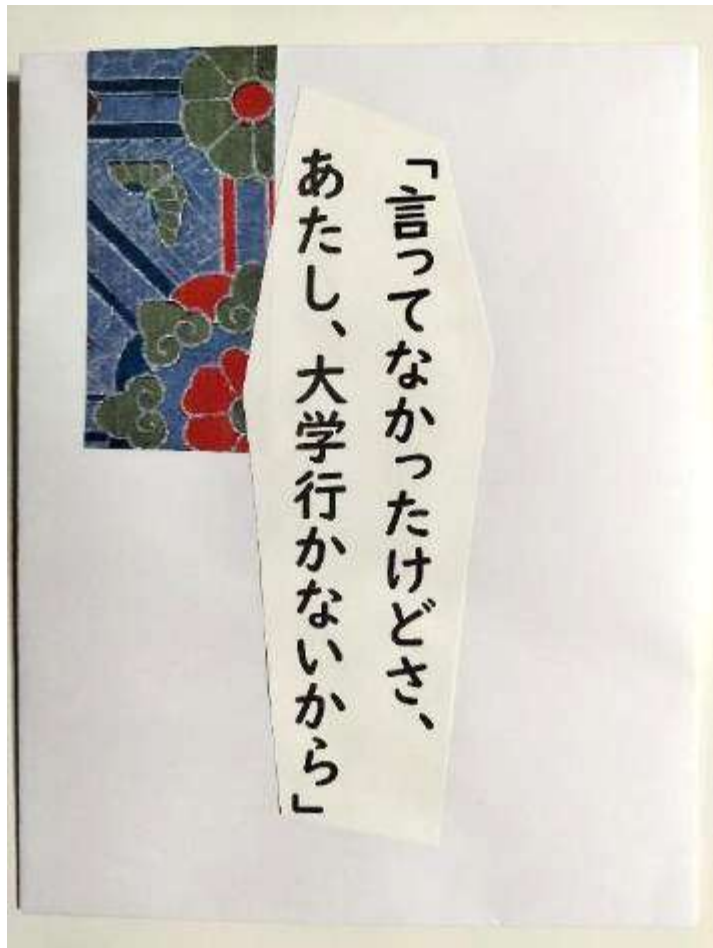
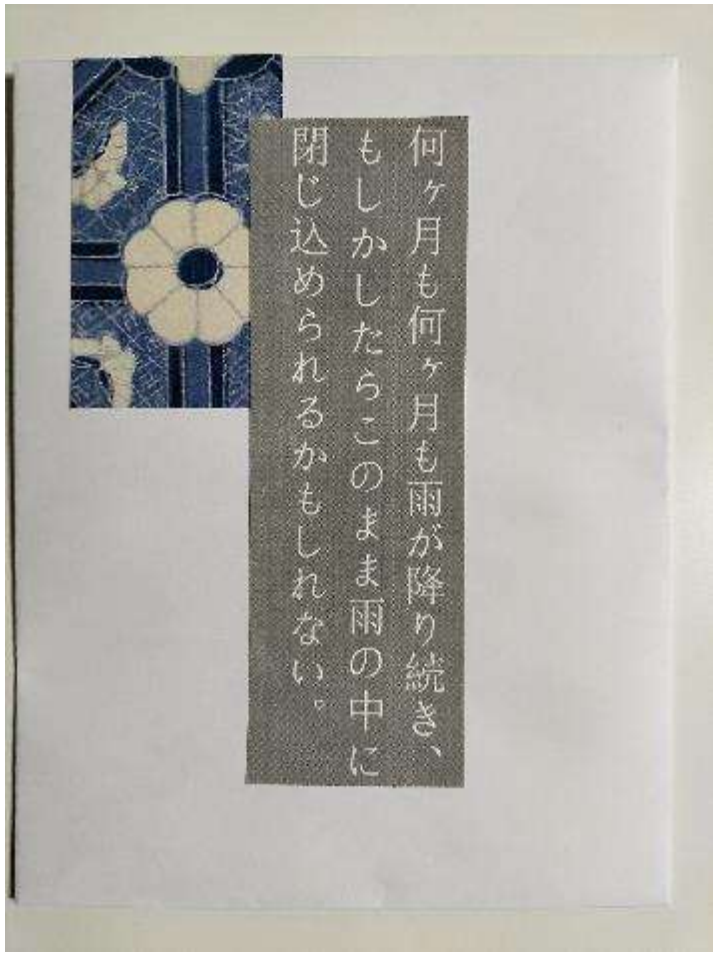


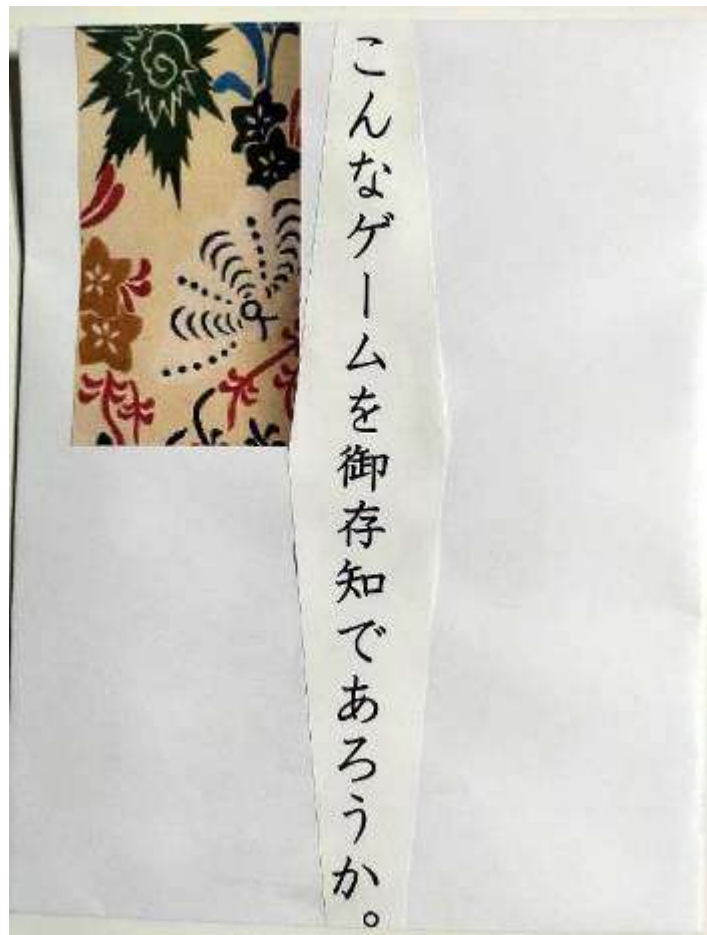
生長


三才
私に過去はなかった




一九二五年に梅鉢工場という所でこしらえられたC五一型のその機関車は、同じ工場と同じころ製作された三等客車三輛と、食堂車、二等客車、二等寝台車、各々一輛ずつと、ほかに郵便やら荷物やらの貨車三輛と、都合九つの箱に、ざつと二百名からの旅客と十万を越える通信とそれにまつわる幾多の胸痛む物語とを載せ、雨の日も風の日も午後の二時半になれば、ピストンをはためかせて上野から青森へ向けて走った。









「ヨートって一体何？
世界の隅まで冒険し隊、春の特別編！」



フリベツト通り四番地の
住人ターズリー夫妻は、
「おかげさまで、私どもは
どこから見てもまともな
人間です」というのが自慢
だった。

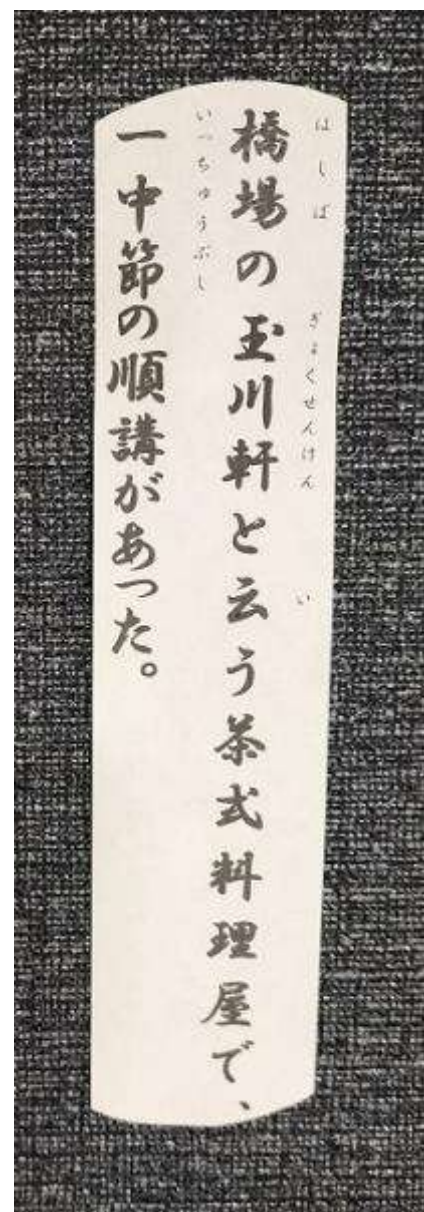
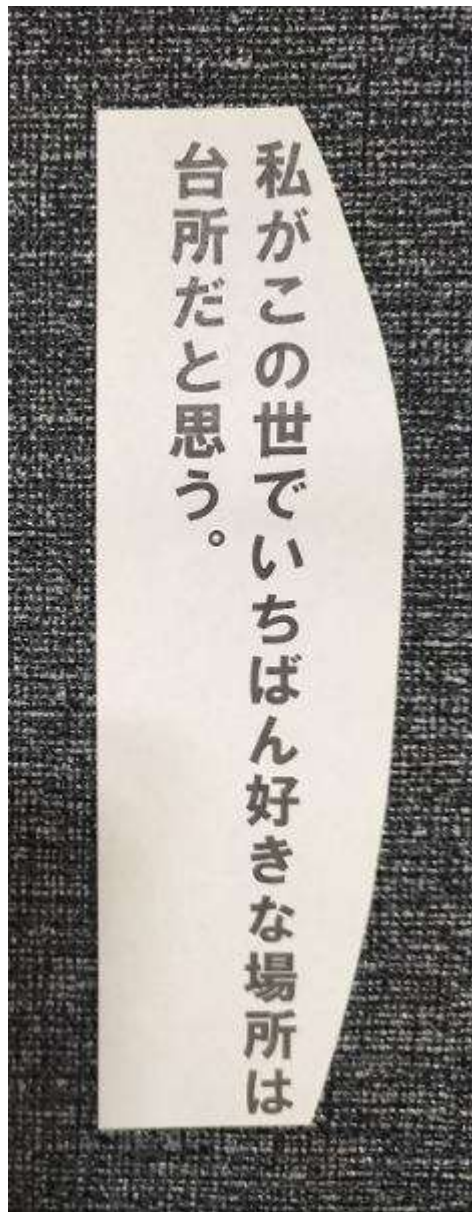
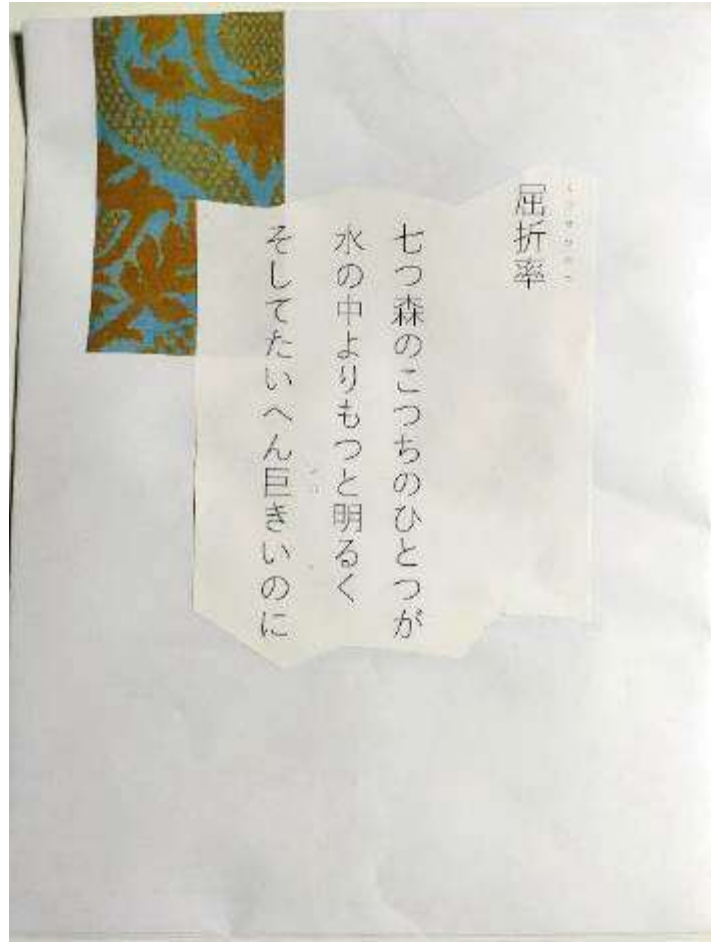
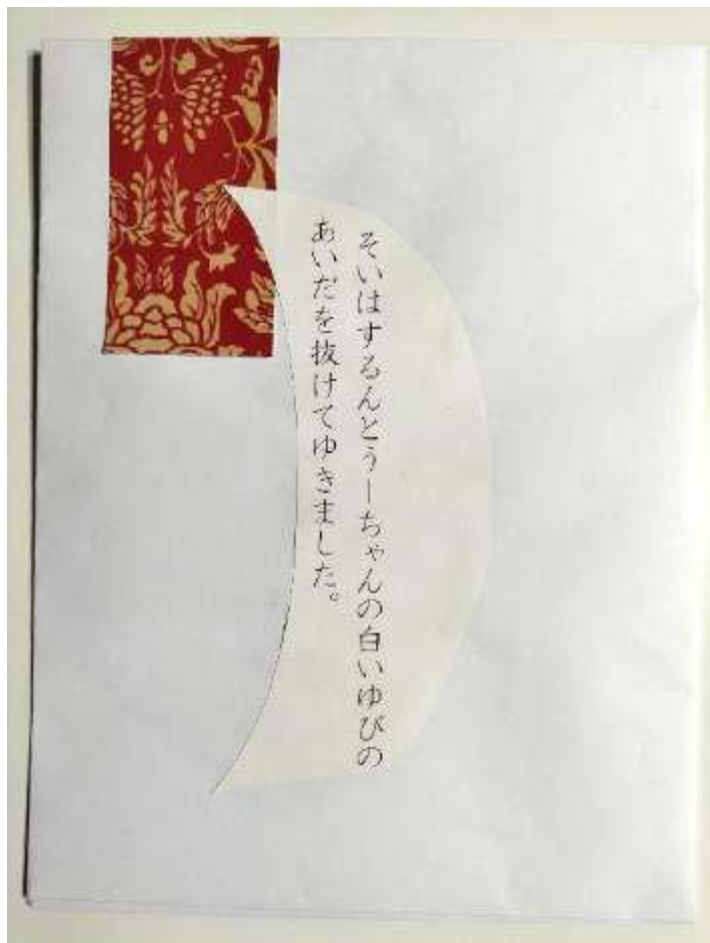


お父さんがいなくて淋しいが、
と聞かれることがある。



陸奥のまのゝかや原とほけども
おもかげにして見ゆとふものを

万葉集



スコップと丸めたビニール袋を持って、あみ子は勝手口の戸を開けた。

四月八日

わたしにとってかけがえのないワルワーラさん！
きのうわたしは幸福でした。

九月十日、火曜日の放課後。

吾輩は猫である。

おれのロエの裏側
にはプリクラが一枚
貼ってある。

ふたつのわが家

二年三組 藤井さゆき

あたしには、わが家が、ふたつ、あります。

ベッドフォード

天は黒雲におおわれ、

真昼は夜となるがいい！

私たち四人は、
また水入らずで過ごしていた。